

愛知県豊橋市立岩西小学校

保護者も地域も巻き込んで  
外国人児童  
支援のかたち

近隣に建つ工場などの影響で、増加の一途をたどる外国人児童。編入学してくる子も、またその保護者も、日本語の理解には遠い位置にいる。求められるのは学習における支援と日常生活のバックアップ。ブラジル人児童を多く抱える岩西小を取材した。

取材：細江智子・西尾真澄／撮影：西尾琢郎



午前中の2時間で  
自由課題に取り組み

「そうすると答えは、トレセントストリエンタクトロ。言ってみて」

一字一字、数字を指さしながらポルトガル語で読み上げる先生。それに続く児童。

「……トレセントストリエンタクトロ」「サンビヤクサンジュウヨン」「……サンビヤクサンジュウヨン！」「できたね！ 次もやってみようか」

額と額をくつつけるようにして、問題を解いていく。その隣では漢字の練習に取り組む子ども。絵日記を書いている子や、絵の具を手にはポスターを仕上げている子もいる。県名カルタに挑戦するグループはなかなかにぎやかだ。

岩西小のサマースクールは、夏休み前半の7月24日から30日までと、後半の8月27日から29日まで開催される。外国人児童は夏休みの宿題を持ち寄り、午前9時から2時間、低・中・高学年に分かれてそれぞれ支援を受ける。完全に自由参加だ。

学校と地域と外国人  
つなげるボランティア

児童数55名のうち、外国人児童は74名。その半数以上がサマースクールに日々通う。岩西小の国際担当教員は4

名＋通訳・教育相談員2名だが、全員がそろわない日もあり、個別指導となると手が回らないことも多々ある。それを支えるのがボランティアの存在だ。

ボランティアは近隣の主婦や学生が中心で、語学や教育の専門家ではない。「教えるのは難しい」と声をそろえる彼らだが、その支援はあたたかく丁寧で、何より忍耐力がある。理解をせかさず、じっくり「待つ」姿に、子どもたちも落ち着いて学ぶ時間を持てるようだ。

また、昨年から豊橋市がボランティアの募集や派遣を取りまとめるようになった。その分、先生方にも余裕が生まれ、一人ひとりの児童に手をかけられる。

「先生！ のどかわいたー。水やりたいー！」

「水やりたい、ではなくて、水飲みたい、と言っただよ」

「水飲みたいー！」

「水を飲むのは休み時間にね。あと5分がんばろう」

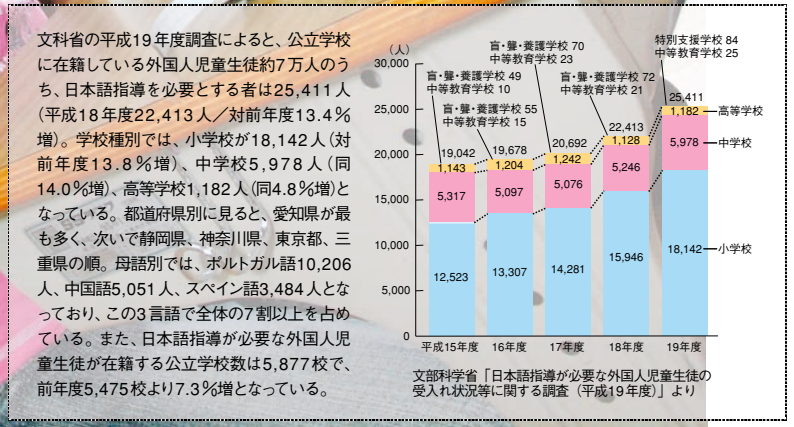
チャイムが鳴った。みんなバラバラのことをしていても、一斉に起立、礼をしてスクールを終える。

保護者の意識を高め  
児童の意欲を高める

「外国人の子どもたちにも、夏休み期間に何かを作り上げる充実感と、作品展を飾る喜びを味わってほしくて」



ボランティアの協力で、一人ひとりに手がかけられる。「初日は恥ずかしがっていた子どもが、声をかけてくれるようになってうれしいです」とはボランティアの学生さんの声。外国人をもっとよく知りたい、仲良くなりたいとボランティアに応募する人も。







ポスターを描きながら、日本語と日本の習慣も理解する。

多い年には年間100件を超える転出入の数。母国へ帰る子、近隣のブラジル人学校へ移る子、再び戻る子……等々。在校期間も時期も、事情もバラバラ。計画的にじっくり腰を据えての指導は難しく、一人ひとりの能力や事情に合わせた対応力が求められる。経験豊かな国際学級教諭、ブラジルの事情にも明るい教育相談員、そして今まで培ってきた教材があつてこそ、この体制を可能にしている。

そう語るのは国際主任の鈴木先生。サマースクール開校前は「夏休みに宿題をしなければならぬ」という意識がない子どもも多かったという。

「4年前に始めた当初は、参加する子どもが一ケタだった日もありました」

ポルトガル語での学級通信や学校便り、充実の独自教材など、学校側の意図や創意工夫が保護者側に浸透し始めるにつれ、サマースクールへの参加者も徐々

に増えていった。

「言葉の問題で子どもの宿題をサポートできない保護者も、サマースクールで対応してもらえらるなら……と、意識が高まってきたんですね」

日本人の子どもたちと同じように、夏休みの宿題に丸をもらう。同じ棚に作品を並べる。外国人児童のモチベーションの高さは、想像するに難くない。

## 学習に対する 姿勢を身に付ける

「頭の上を言葉が通り過ぎて、お客さんのように座っているだけで授業時間が過ぎてしまふんですよ」

入ってきたばかりの子どもについて、鈴木先生はそう表現する。

1990年に初めてブラジル人児童が編入し、2年後には17名に増加。その年、国際学級が設置され、体育、図工など技能系の授業は通常学級で学び、国語・社会などの教科は国際学級で学ぶというシステムが完成した。

少人数で、母語を交えての授業と丁寧なフォロー体制。国際学級は子ども同士でも気がねなく母語で話し合える場所でもあり、またそうした中でストレスも緩和され、学習に対する姿勢もできあがっていく。

さらに、今年から岩西小勤務となった常駐指導の教育相談員・高橋ビッキー先

でこそ、相互理解も深まります」

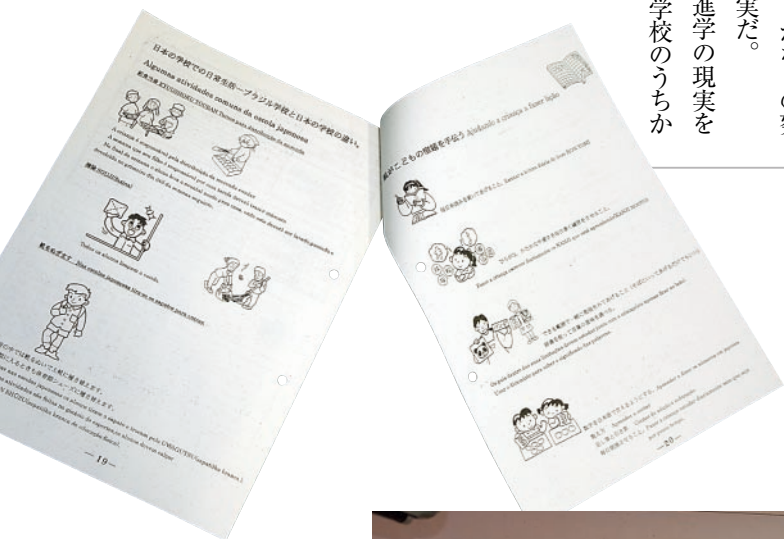
そう話すのは寺部校長。岩西小に赴任した当時は、文化的違いに戸惑ったと言う。だが、受け入れ、育てる基本に、日本人児童との差異はない。

今後は通訳のできる教育相談員の増員や、国際担当教員の育成なども考えていかなければならないと寺部校長は語る。豊橋市には、市内の高校を卒業し、教育相談員になって通訳の仕事をしているブラジル人もいる。このようなバイリンガル・バイカルチャーの人材が、これからの社会にますます必要となるだろう。

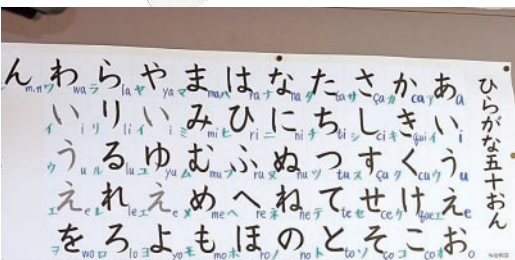
外国人児童には、そうした将来の可能性がある一方、高校を受験できるレベルの日本語力を取得するには、かなりの努力が必要となるのもまた現実だ。

「中学校に入ってから高校進学の実感を知らずには遅いのです。小学校のうちから準備しておかないと」

岩西小での学校生活が未来への道しるべとなるよう、寺部校長をはじめ先生方や地域ボランティア、そして保護者が一団となって強力なバックアップ体制を整えている。それは日本人・外国人と隔てることのない学びにつながり、ひいては真の国際化への一歩となるのだ。



外国人説明会の配付資料。学用品の説明は絵入り、連絡帳に書くための日本語の例文もあるなど、外国人保護者への配慮にあふれている。



国際資料教室「アミーゴブラザ」に置かれている教材。初歩的な学校でのマナーを日伯両方の言葉で解説したプリント、一枚一枚ラミネートされたカード。ほとんどが手作りだ。そのノウハウは、豊橋市でも外国人児童生徒教育研究部を通じて、他の学校でも生かされている。



教室内の掲示。ca. qui. cu……と、ローマ字ではなくポルトガル語が添えられている。

の協力を得ながら、バザーやお菓子作りの教室を開くなど、日伯交流の席も設けられている。

まったく、何も分からない状態で入ってきた外国人児童が、保護者を含めて安心感を得、日本の学校生活になじみ、日本語で学び始める。そこでようやく、ブラジル人の明るい、盛り上げ上手で世話好きな気質も表出する。運動会やサッカー部、児童集会のカラオケ大会など、日本の子どもたちと一緒に盛り上がるイベントのみならず、普段の学級でもその力を発揮。日本語のできるブラジル人児童が、日本語の分からない子に先生の言葉を通訳するといった場面も見られるという。

## ブラジルから研修に エリ先生奮闘中

本年度は、自治体職員の協力事業として、ブラジルからエリ先生ことエリエーネ先生が研修に訪れている。6月から11月までの6カ月間、日本語をイチから勉強しつつ日々奮闘中だ。サマースクールでも、エリ先生は日伯の架け橋として指導にあたっている。

帰国後はパラナ州の教育現場に戻り、日本での経験を生かしたいというエリ先生に、お話を伺った。

―岩西小の印象は。

「言葉が通じないのに、日本の先生方が

## 日本人・外国人を隔てず 真の国際化へ

「多文化共生の時代ですから、外国人児童が増えるという流れは、どこの地域でも避けて通れません。それぞれの良いところを取り入れて、共に生活していく中

生の力も大きい。授業の補助はもちろん、言葉の壁からおこる日本人の子どもとのトラブルをおさめたり、連絡帳や保護者に配布するプリントを翻訳したりと大活躍だ。

「子どもがストレスで混乱したときに、すぐに話を聞いてあげることで大半は落ち着きます。混乱した理由を尋ね、一つひとつ原因を取り除いていくことが大切ですね」と高橋先生は語る。

## プレクラスで 日本の学校生活を学ぶ

問題となるのは言葉だけではない。朝礼で皆が並んで静かに先生の話を聞くといった、日本では当たり前のことも、彼らにとっては当たり前ではないのだ。

朝礼、給食、掃除。外国人児童にとって、日本の学校での集団生活は、言葉や勉強以前に戸惑うことばかり。これに対処するため、岩西小では、日本に来たばかりで何も分からない子どもたちのために「プレクラス」を設けている。1カ月間、マンツーマンで、日本の生活に溶け込めるように指導する場だ。

一方、保護者との信頼関係を築く努力もなされている。4月には国際学級担当と通訳による外国人説明会が行われ、6月にも地区別懇談会での説明会を行っている。PTAには国際部を設置し、日本語とポルトガル語の両方が話せる保護者